

# 基礎から臨床まで

## — 心理学基礎実験で土台を築く

専修大学人間科学部 教授

大久保街亜 (おおくぼ まちあ)

### Profile—

2002年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（心理学）。2014年より現職。専門は認知心理学。著書は『伝えるための心理統計：効果量・信頼区間・検定力』（共著、勁草書房）など。



専修大学の心理学科では卒業前の4年生にアンケートを行っている。多くの学生が、役に立った科目を聞くと心理学基礎実験（公認心理師科目における心理学実験）を、ツラかった科目を聞くとやはり心理学基礎実験を挙げる。つまり、心理学基礎実験は役に立ったが実にツラかった科目である。どの大学も似たようなものだろう。

筆者の前任者で、専修大学心理学科（設立時は人文学科心理学コース）の設立メンバーのひとりである中谷和夫（東京大学名誉教授、専修大学元教授）は、心理学基礎実験を、心理学科における通過儀礼だと言っていた。ちょうど医学部や獣医学部における解剖実習のようなもので、その過酷(?)な体験を経て、学ぶ意義、奥深さ、自覚などが身につくというわけである。

### カリキュラム構成

この役に立つがツライ心理学基礎実験は、専修大学における心理学教育の土台となっている。本学科は14名の専任教員を、基礎系7名、臨床系7名ずつ配置し、幅広くバランスよく心理学を学べることが特徴である。実証科学である心理学は、どの分野であろうと多かれ少なかれデータに依拠する。そこで心理学基礎実験1と2をそれぞれ1年次、2年次の必修とし、それらを土台に幅広くバランスよ

く学べるカリキュラムを設計した。この土台が3年次からの研究室の配属と卒業論文の作成を支える。また、心理演習・心理実習という公認心理師資格対応の実習科目の基礎を担う。心理学基礎実験は教育・研究の基礎であり、臨床での実習の基礎でもある。

心理学基礎実験1と2はそれぞれ通年1コマ、通年2コマで開講される。公認心理師の受験資格だけを考えれば、半期1コマで対応できる。しかし、実証性を重視する心理学の特殊性、また、本学心理学科の幅広い専門領域を鑑み、半期1コマの6倍の時間数を設定した。この豊富な時間数に裏書きされた授業内容が、幅広く心理学を学びそれを深める礎となる。

### サポート体制

実習・実験科目が複数あるため、科目間の連携を重視している。学術用語の統一はもちろん、1,2年生のうちは共通したプラットフォームで統計ソフトウェアを用いる。具体的にはR Studioを用い、Rを使った教育を行なっている。これがR Markdownを使い、卒業論文でデータ分析から執筆まで統一の環境で完結させることに繋がる。

施設面では、本格的な実験を行うため、教員や大学院生が研究でも使用する施設を用いる。動物実験室とスキナーボックス、防音

シールドルーム（脳波測定）、マジックミラー付き行動観察室、知覚・認知実験用の暗室など多岐に亘る設備をフル活用する。

丁寧な指導を心がけ、個別にレポートを返却する。受講生1人ずつ5分から10分をかけ、細かく指導する。これが受講生にとって貴重な学習機会となる。

さらに、学生が自由に使用できるコンピューター室を用意し日々の学習をサポートする。コンピューター室には、1学年分の人数にあたるおよそ70台を設置している。このコンピューター室は心理学科生専用で他の学科の学生は使用できない。そのため、結果として学生たちの憩いの場もなる。学生は8:00から23:00まで好きな時間に使うことができる。また10:00から18:00にTAを配置し、質問を随時受け付ける体制を整えている。

### 心理学基礎実験1

心理学基礎実験1は1年次の必修科目である。通年で行う利点を活かし、講義形式と実習・実験形式を併用し授業を進める。ひと月に一つのトピックでゆっくり進行する。取り上げるトピックは、記憶の系列位置効果、重量感覚（ウェーバー、フェヒナーの法則）、囚人のジレンマなどである。これらのトピックは、井関(2019)の調査の通り、多くの大

学で採用されているものだ。読者にも馴染み深いものであろう。

心理学基礎実験1ではオーソドックスなトピックにじっくりと取り組む。背景や先行研究を講義形式で説明し、その検討方法まで学んでから、小集団で実験・実習を実施する。この授業を、教員2名、TA5名で担当する。1学年70名の定員なので、スタッフ1人およそ10名の受講生を担当する。また、心理学コンピュータ実習という別の科目があり、コンピュータに関する技術的な教育はこちらが担う。二つの実習科目を連携させ、1年次の実習教育をじっくり進める。

### 心理学基礎実験2

心理学基礎実験2は、1年次で学んだ基礎を踏まえ専門性を高めた内容になる。卒業論文につながるよう、受講生自身が研究計画を立て、実施できるスキルを身につけることを目指す。

受講生が卒業論文で立てる研究計画は、テーマも方法もさまざまである。それに対応できるよう、幅広いテーマで方法に偏りがなくなるよう種目を用意している。例えば、知覚実験として「コヒーレント運動」、認知実験として「記憶の分散効果」、動物実験として「オペラント条件づけのVR-VI反応率差」、検査として「WAIS-IV知能検査」、調査として「自尊心」、観察として「描画行動」などを行った。これらを含め合計20種目が用意され、受講生は実験、調査、観察、検査を一通り経験する。

たくさんの種目があるので学期中は毎週新しい種目を行い、次の週にそのレポートを提出する。1年次では1ヵ月をかけじっくり完成させたものを1週間で行う。冒頭のアンケートでのツライという

感想は、毎週続くレポート作成のためである。

動物実験から知能検査まで幅広い実験種目を実施するには、それを支えるスタッフと設備が不可欠である。現状では、教員3名、実習助手2名、TA7名の12名体制で、定員70名の2年次生に対応している。単純計算で、スタッフ1人あたり6名の受講生を担当する。TAは学内、学外から博士課程の大学院生を募集する。TA同士で仲が良くなり、将来的に共同研究に発展する例もいくつかある。先に挙げた20の種目は、スタッフ12名の専門性がある程度反映されたものである。例えば、「コヒーレント運動」は、運動視の研究をする大学院生TAが担当したものである。スタッフ自身の研究を反映することで種目内容が高度になる。授業内で得られたデータが学会で発表され、学術論文になることもある。実際の研究に近い内容を経験することで、受講者自身の卒業論文に向けた参考にもなると考えられる。

### 自由実験演習

たとえ（2年次生にとって）高度な内容でも、与えられたテーマで実験や調査を行い、指定された手順でデータ分析を行うだけでは、自分の研究計画の立案には繋がらない。自分自身の頭で考え、研究結果をアウトプットする経験が重要だ。自由実験演習は、アウトプットのためのものである。この演習で受講生は4名程度の小グループで、自らのアイデアのもと7週間を使い、研究を行う。つまり、テーマを選び、文献研究を元に研究計画を立案し、データを探って分析し、レポートをまとめるという一連の作業を経験する。もちろんテーマ選びからグループで行う。最終的な結果は、論文形



写真1 自由実験演習における研究成果発表の様子

式でまとめるだけでなく、ポスター発表も行う。最終段階では泊まり込むグループもある（1,500円で泊まれるセミナーハウスが大学近くにある）。写真1が自由実験演習の最終日に行われたポスター発表の様子である。発表タイトルに「顔の再認：文脈の信頼度と顔の魅力」などがある。なかなかのものだ。学会さながらに在席時間を設け、発表と質問を行う。教員やTAも遠慮せず参加する。最後に参加者全員で採点を行い、最優秀賞と優秀賞を決定する。最優秀賞を獲得したグループは飛び上がって喜ぶ。これが2年間続いた心理学基礎実験のフィナーレとなる。

こうして学生たちは、疲労と充実感を抱え、心理学基礎実験に費やした2年間を終える。通過儀礼を経て、高度な専門科目を学ぶ3年生になるのである。

### 文献

井関龍太 (2019). 心理学実験実習のメニューはどう決まるか. 心理学研究, 90, 72-79.